である。最初の歐洲旅行家が、アンコール・ヴトに來た時には、中央塔の小房の四門は壁で塞いであり、其前には各佛像の坐像があつて、云はゞ信者の禮拜を受けるのは、小さい聖殿の像でなく、この佛像の樣になつてゐたのである。終に、寺僧の承諾を得て、其の一門を開いた所、像の臺座が轉んでゐて、堆高い蝙蝠の糞の下に神像の斷片を見たに過ぎなかつた。印度教神の時代は過ぎて、佛陀の力に讓つて了つたのである。

然し、こゝに次の如き新事實を見る。研究が進み、觀察が確かになるに從つて、多くの點から、今日勢を得てゐる佛教は、其の形式に差はあつたにしても、カンボヂアの印度殖民の當初にも、等しく勢力のあつたものとしなければならない。或場合の如きは、要するに、横取されてゐた寺院を、佛像が取返したに過ぎないのもあり、佛像は此の寺の侵入者ではなく、唯、元へ歸つただけである。こゝで此の立證と、婆羅門族に反して、佛教々團に漲つてゐた傳道精神について知る所とが、極めてよく一致する事は特に云ふまでもあるまい。斯くて、婆伽梵 Bhagavat の信者、即ち、佛教徒が、濕婆や毘瑟笯